2013年
5月28日
火曜日

ものを伝えるということ

豊原法彦　教授（経済統計学）

愛という字は、辞書によると、心の下にある部分が足のもつれた様子を示していることから、人がその状況から立ち去りがたい様子を示しているそうです。この字の「あい」という読みは意外かもしれませんが、音読みです。つまりこれらの文字は漢字が儒教という考えを伝えるために千字文と共に日本にもたらされたとき、それに相当する概念が日本語になっていなかったものと考えられます。これに対して恋は音読みで「れん」、訓読みで「こい」であることから漢字がもたらされる前から「こい」という概念が存在していたと思われます。

同じ音読みでも、皆さんご存じのように関西学院の西は仏教などで良く用いられる漢音で「セイ」と読み、関西地方などの場合にはそれより前に日本で用いられていた呉音で「サイ」と読んでいます。

読みだけでなく、日本語にはひらがなとカタカナがあり、特にカタカナは明治以降には新しい概念を輸入するときにストックするという新たな役割が与えられました。かつて中国ではキリスト教のagapeを「愛」にあてはめることで概念を輸入したのだと推察できますが、いわゆる「無償の愛」との乖離にも留意する必要がありましょう。日本にダイレクトにこの概念がもたらされていたならば、とりあえずこれを「アガペ」と翻訳しておき徐々に浸透させていく方法もあり得たかもしれません。

このように文化が異なると概念を伝達する際には単に言葉だけでなく、文化的な背景のすりあわせを含む知的作業が必要となります。そして両者間できちんとそれらの概念を一致させておかねばなりません。現代社会ではそれらをプロトコルと呼んでいます。会議などの儀典や実験、手術などの手順という意味でも使われます。これは情報の伝達や手続きの際に不要な混乱が起きないように用いられるもので、同じような状況ではどこでも共通して適用されます。つまり、プロセスを実行する段階では担当者が独自の判断で価値を付け加えることは期待されていないばかりかノイズとなり、望まざる結果を生み出すことになります。このような機械的な対応は人間よりコンピューターの方が迅速的確に実行できることから一昔前にはＩＴと呼ばれていたものがＩＣＴとコミュニケーションを示すＣが入ったものに進化しています。

このように考えてきますと、今後の社会ではどこで付加価値を生み出せばいいのでしょうか。現在はデータ収拾が容易になりました。またインターネット上には、株価、為替やtwitter、さらには写真や動画などたくさんのディジタル情報が発信されています。それらはビッグデータと呼ばれ、その中から有為な組み合わせ捉えそれらの間の相関関係を考えるために数値計算やテキストマイニングといった統計分析行われています。もちろんペタバイト（テラの１０００倍）、エクサバイト（ペタの１０００倍）といった大容量になればそれだけ高性能のマシンが求められますが、そのようなファクトに基づいたデータから結論を導き出し、それに基づいたシミュレーションを何度も行うことで複数ある選択肢の中から、合理的な基準で最適な物を選択することにこそ重要になるのではないでしょうか。■